

子どもの世界を支える私たち

～幼小が共に考える育ちと学びの接続～

京都教育大学 教育学部 幼児教育学科 長期研修生

(亀岡市立城西小学校) 幸村奏

平成29年小学校学習指導要領

第1章 総則（p. 21）4 学校段階等間の接続

（1）**幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫すること**により、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことができるようにすること。

幼児教育と小学校教育の違い

- ・ 幼児教育 「遊び＝学び」
- ・ 小学校教育 「遊び＝休み時間」

小学校教員が「遊びの中の学び」を捉えることは難しい。

⇒幼児教育の立場の先生の解説が必要

育ちや学びをつなぐために・・・

☆ 幼児教育の立場の先生と小学校教員とで同じものを
共に見取る機会の充実⇒事後研究会の重要性

☆ 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（１０の姿）
を共通用語として子どもの学びや育ちを共有する
⇒「１０の姿」の理解

自立心

協同性

**健康な
心と体**

**道徳性・規範意識
の芽生え**

**豊かな
感性と表現**

**幼児期の終わりまでに
育ってほしい姿
(10の姿)**

**社会生活との
関わり**

**言葉による
伝え合い**

思考力の芽生え

**数量や図形、標識や文字
などへの関心・感覚**

**自然との関わり
・生命尊重**

社会生活との関わり

家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気づき、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。

健康な心と体

幼稚園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。

道徳性・規範意識の芽生え

友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。

思考力の芽生え

身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気づき、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。

自立心

身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。

幼児期の終わりまでに 育ってほしい姿 (10の姿)

数量や図形、標識や文字 などへの関心・感覚

遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。

言葉による伝え合い

先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。

自然との関わり・生命尊重

自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気づき、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることを覚えるようになる。

協同性

友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。

豊かな感性と表現

心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気づき、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

動画「写真で見る１０の姿」

私自身、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を文字で習った時に、高度なことが書かれている部分もあり、「本当にこんな姿が幼児期に育まれるのか？」と思う部分があった。

しかし、幼児教育の現場を参観する日々の中で、確実にこれらの姿が遊びの中で日々育まれているのが分かった。

⇒実際の子ども姿ほど、「１０の姿」のイメージや理解が進むものはない！！

⇒現場参観の機会がない先生方にも、少しでも伝えることができれば・・・

そんな思いで制作したのが、動画「写真で見る１０の姿」です。

チャレンジ！！

「子どもの学びや育ち」を共に見取る

（見る視点）

- ・ 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（１０の姿）
- ・ 小学校生活とのつながり

※「幼児教育現場の子どもの姿」だけでなく、「小学校の子どもの姿」もこの視点で見取ること、また、見取りの内容を幼小の両方の立場の先生で交流することができると、より充実した研修となりました。可能な範囲で行って頂けたら幸いです。

ワークシート

社会生活との関わり

健康な心と体

道徳性・規範意識の芽生え

思考力の芽生え

自立心

自然との関わり・生命尊重

協同性

数量や図形、標識や文字
などへの関心・感覚

言葉による伝え合い

豊かな感性と表現

※その他(小学校教育や教科学習とのつながりなど)→欄外に記入

こうした演習を繰り返すことで・ ・ ・

- ・ お互いの教育について知る
- ・ 子どもを見る視点の違いに気付く
- ・ これまで気づくことのできなかった子どものよさに気づくことができる

⇒互いに尊敬し合うことができる関係

「10の姿」を小学校教育の中に・・・

「10の姿」は3つの資質・能力をかみ砕いたもの。（10の姿＝3つの資質・能力）

⇒小学校が引き継いで育てていく力！！

決して幼児期の達成目標ではない。

「10の姿」で子どもを見取る

- ・ 子どもを捉える視点（ものさし）が増える
- ・ これまで気づけなかった良さが見えてくる
- ・ 子どもが自分の良さに気づくことができる！

（⇒☆Aくんの例）

Aくんのエピソード

A君は、色んな事情があって教室に入ることが難しくなっている児童である。ある日の理科の時間。その日もみんなの中に入ることが出来ず、個別で理科の実験で使う「ゴムの力で走る車」を作っていた。

しばらく、図書室で実験をしていたが、だんだん飽きてしまって、興味のある「虫取りをする！」と言って外に出てしまった。

しかし、その途中でみんなが体育館で実験しているのを見て、「ぼくも取って来る」と言って車を取りに行き、久しぶりにクラスの人々と合流することができた。そこでは、教科書に書かれているような実験は全くせず、体育館にある小さなコーンを並べてコースを作って車を走らせていた。

彼がジグザグに並べたコーンは、車を走らせた時に当たるか当たらないかの絶妙なバランスで並んでいて、当たらないようにゴールまで走らせるのがちょうど良い難しさという感じで、彼なりによく考えていた。そこに、実験を終えた友達や先生が合流して一緒に楽しむ姿も見られた。

Aくん

【学習評価】

- ・ 学習に参加していない
- ・ 教科書通りの実験は全くしていない

⇒△成績は2



【10の姿】

- ・ 工夫してコースを作る
(思考力の芽生え)
- ・ 友達や先生と交流
(言葉による伝え合い)

⇒Aくんなりの成長を捉えることができる。

⇒先生が本人に伝えることでAくんの自己肯定感UP！

保幼小連携・接続先進校からの学び

①要録の活用

一人ひとりの育ちや園でしていた支援などを理解するために大変重要なもの！

- ・ 保育者と1年生担任が要録を挟んで児童の情報を引き継いでいる。
- ・ 1年生担任が支援の方法等で困った時に、まず手掛かりにするのが要録。

②環境の工夫

入学時の環境を、幼児教育施設の環境に近づけることで、
子ども達が安心して新しい環境で過ごせるように！

- 幼児教育施設に何度も足を運び、園の環境を把握。
- 机・椅子をローテーブル・カラーマットにしたり、親しんでいた遊びができるように準備したりする等、入学時の環境を幼児教育施設の環境に近づけることで安心感を。

③交流活動

事前・事後の打ち合わせを大切に、小学校主導にならない園児も1年生も活躍できる互恵性ある交流活動を！

- ・年に1回の交流活動ではなく、年間を通して何度も交流を重ねることで積み上げられていくものがある。
- ・事前・事後の打ち合わせを大切に、交流活動の内容を保育者と教師が共に考え、活動後の振り返りをすることの重要性。
 - それぞれの子どもの実態に合った活動内容となる
 - 教師同士が互いの教育を理解する機会となる

保幼小連携・接続先進校の共通点

- ・ 幼児期の学びや育ちが小学校へ確実に引き継がれることが重要課題として共通理解されている。
- ・ 年間を通して継続的に交流の機会がある。
- ・ 交流の際に事前・事後の話し合い（教師同士の交流）が必ず行われている。
- ・ 子どもを見る共通の視点（柱）が構築されている。
- ・ スタートカリキュラム、アプローチカリキュラムが幼児教育の立場の先生と小学校教員とで共に考えられている。
- ・ 幼小連携加配等、保幼小連携接続を進めるための人材が確保されている。

自分にできること

- 「10の姿」を共通用語として、「要録」を通しても子どもの情報を確実に引き継ぐ。
- 何年生の担任であっても、「10の姿」を子どもを見る視点の一つにして見取り続ける。
- 互いの教育を理解することのできる連携活動を計画する。
(事前・事後の話し合いを大切に)
- 「幼児教育」のよさを、小学校の実践に取り入れることに挑戦。
- 情報を自分だけのものにすることなく、情報共有する。

地域の実情に応じた 保幼小連携体制の構築

(京都教育大学教授 古賀 松香先生)

地域の実情と山積する課題

- 幼児教育施設の多様化（公私立、幼保認）このバランスが地域によってさまざま
 - ⇒保幼小連携・接続に関する取組の必要感や重要性の認識にばらつき
- 保育・教育施設及び小学校の教職員の多忙の未解決と働き方改革
 - ⇒多様な施設間、保育者・教師間の時間調整が困難⇒内容を検討する時間と体制確保が困難
- コロナ禍による交流活動等の困難化
 - ⇒混乱の中で方法の模索もできず、消滅状態にある地域も
- 幼児教育推進体制構築状況のばらつき
 - ⇒特に都道府県／市町村に幼児教育センターがない場合に多様な施設間をつなぐ研修等の推進が難しい

求められる連携体制の構築

- 全乳幼児教育施設と小学校を対象として、研修を行う指導体制の確保
- 各校園のリーダー層の意識改革を推進する研修実施
- 小学校区を基本とする等、基本的な連携体制の整理
- 連携・接続主任を置く等、各校園レベルの推進体制構築のバックアップ
- 実践の交流と質向上を目指す研究指定等によるモデル地域からの拡充

今ある幼小接続を一步前へ

【 接続のレベル】

①実践の交流はありますか？

生活科や給食交流、運動会等の行事参加・・・

②情報は行き来していますか？

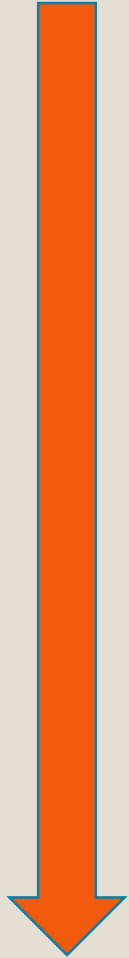
- 1) 特別支援の必要な子どもの情報
- 2) 要録
- 3) 教育内容の情報交流

③内容・方法は接続していますか？

目標を共有した相互の接続カリキュラム開発

④効果を実感した好循環はありますか？

子どもの育ちと学びがつながる喜びを感じ、さらによい実践を目指す



持続可能で効果的な連携体制構築

【今後重要となる保幼小連携】

- ・ 接続の取組とは？ 持続可能なシステム構築：連携体制、カリキュラム実践、交流実践、カリキュラム・マネジメント
- ・ 現場での実践が充実し、保育者・教員が効果を実感する取組の継続

⇒ 持続可能で効果的なシステム構築により、回り続ける好循環サイクルを創る